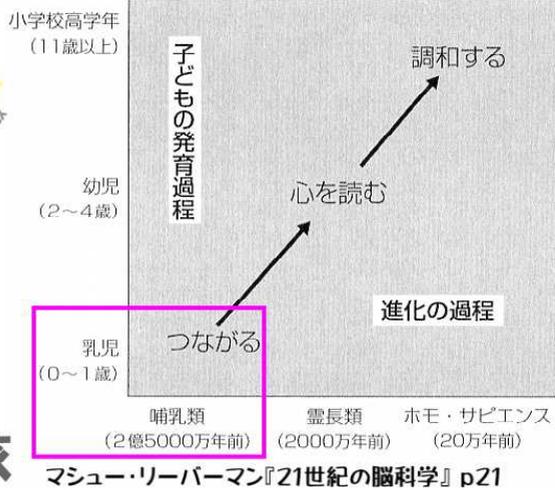


# 進化に沿ってヒトの発達を考える



進化の過程と子どもの発育過程で現れる3つの脳力



マシュー・リーパーマン『21世紀の脳科学』p21

両棲類から哺乳類へと進化を遂げるときに危険や恐怖から回避するため身を守る情報は**大脳基底核**に格納された。こうした古い脳に対して、学習によって得た理性など新たな情報は層を重ね、大脳新皮質を形成していくことになる。

▶ 間主観性の理解に相当

p22 //未熟なままで生まれ、ひとりでは生きていけない乳児は、常に養育者につながり、世話をしてもらう必要がある。そこで乳幼児の脳は、養育者から放って置かれるという社会的な分離を、「社会的苦痛」として感じるように発達した。養育者がそばを離れ、愛着関係を脅かされると、乳幼児は”不快な痛み“を感じて、苦痛の泣き声をあげ、養育者をそばに呼び戻す。一方の養育者の脳も、我が子の世話を報酬と捉え、「社会的喜び」を感じるように発達した。こうして私たちの祖先は、**母子の愛着行動を通して**「社会的な**つながり**」を手に入れたのである。しかも、養育者と常に**つながっていたい**という乳幼児期の欲求は、**成長後も失われず、生涯にわたって私たちの考えや行動を決定づけるのだ。** //

ヒトだけが発する

「うぶごえ」▼

**胎**内では肺は羊水で満たされている。産道をとおるとき、肺が圧迫され羊水が排出される。代わりに空気が入る。これによって、**うぶごえ**が出る。

では、人間と同じ哺乳動物の、犬や猫ではどうか。ウシの場合、産まれ出るとき口から大量の羊水は出てくるが、**うぶごえ**を聞いたことがないとある牧場主は話す。野生では危険にさらされる**うぶごえ**を、なぜ人間は出すのだろう。

**うぶごえ**を聞いたおとなは、あかちゃんが「ないた」と表現する。しかし、新生児の「なき（泣き）」には涙が伴っていない。大粒の涙を流すのはもう少しあとのことだ。あかちゃんが「ないたら」、おなかがすいたのか、おむつをかえてほしいのか、だっこしてほしいのか、おとなは想像するほかない。呼吸とともに鳴動しているにすぎない音がやがて言葉が発することになる。

お産をした母が、  
子に、最初にすることは何でしょう？

☆ 授乳

☆ 声をかける

☆ 抱く

解は冊子最後尾

生まれ出たそのときから母がわかり、他と区別できる。母に身を寄せるワケは、母を認識しているからではなく、わが身を守る進化の履歴が脳の深部に蓄積されているからだ。満1歳の誕生日を迎える頃、つかまり立つ。ふらついても手が出る。目標に直線で向かっていた子は、やがて障害物をさけるようになる。➤

## 3歳の自立

満3歳では、自力でどれくらい歩くのだろう。300メートルほど歩くと抱っこをせがむこともあれば、延々と1キロほどを歩くこともある。興味次第か？ 2キロの道のりを歩いている3歳児とつきあったことはあるが、満年齢は4歳だったかもしれない。上述とは別の、同じ3歳児が、500メートルを歩いたとき、楽しかった思いを込めて「遠いところへ行った」と誇らしく話した。(2キロを遥かに超える距離を歩いた3歳にも出会ったことがある)

〈遠い〉という言葉が発しても〈近い〉という表現をわたしは聞いたことがない。保育士(おとな)がつかう言葉をその意味するところでわかっているのだろう。しかし、対語としての〈近い〉はまだのようだ。声かけの大切さを悟る。

保育園など集団で歩くとき、先

生が手をひくには限りがある。手をひいてほしいけれど、明らかに遠慮している子がいる。一つのとてのひらに2つの可愛い手が寄ってくることもある。お互い歩きにくい。おしゃべりしながら歩くが、抱っこをせがむ子は、まずいない。しかし、親子だとそれはあつという間だ。50メートルも歩けば「抱っこ!」。ベビーカーが目に入ればなおさらだが、ベビーカーに手荷物が乗ってれば子どもは歩く。あるいは、ベビーカーを押してお手伝いをする。気分屋さんで、じつは歩くのも楽しい。

3歳、ひとりや友達といるときは平気で歩いてすすぐのに、親がそばにいとなんてでもしてもらいたい。靴もはかせてもらいたい。服も着せてもらいたい。でも、自分で靴もはけるし服も着られる。お手伝いも好き。自立をお手伝いするのが、おとなの役割だろうか。

## おみそ4歳

なんでも自分でやりたがるのは3歳の特徴だ。自己中心の気分屋さん。しかし、4歳になると周囲を観察するようになる。1歳でも、大きいおねえちゃんやおにいちゃんがしていることをじっとみていて真似をしようとする。それとは違う。〈同じこと〉がしたい。今ではあまり見かけなくなったが、まちなかで遊んでいる子どもの集団に幼い子がひとり・ふたり

とまじっていた。鬼ごっこで逃げまどうなかにいたその幼い子は4歳や5歳だった。わたしが子どもの頃は、彼らを「たまご」と呼んだ。遊び始める前に「たまご」を宣言してもらう。つかまっても鬼にならなくてすむ。子どもの遊びを書いているエッセイなどでは「みそっかす」縮めて「おみそ」というものもある。

みそっかすとして子どもの集団にデビューするのが4歳ということになろうか。異年齢保育を保育園で実

▼ おもに母とだが、保護者と一体で自己を確立していくプロセスは、すでに始まっている。これを「間主観性」という。からだどころを間主観性というしくみで守られながら、乳児は「環境」という刺激に「みずからのモノサシ」をもちあわせるようになる。あかちゃんは遊びを通して固有の（人それぞれの）モノサシを得る。2歳半を節目としてモノサシは「かたち」を為し、学習機能を保有した道具として使う。

.....

行すると、3歳/4歳/5歳をさす。しかし、かつて普通に見かけた子ども集団には年長者が含まれ、小学校高学年のお世話があった。園では「5歳」が異年齢の最年長なので、先生がその役を引き受けることが肝要ではないか。

先生が常に遊び仲間の年長を演じ

ることができれば、敢えて3歳・4歳を交えなくとも、5歳児クラス単独で異年齢保育は実現する。

つまり、みそっかすの呼称は侮蔑的だが、できる/できないを包含して、仲間に加えるというやさしさ、あるいは掟（おきて）を学ぶ輝かしいスタートなのだ。

## 5歳の 伸びしろ

3歳、4歳は親から離れて、園や祖父母の家でひとり泊まりはまだ難しい。でも、5歳になるとドキドキ、初の体験になる機会になるかもしれない。



ツバメやヒヨドリなど、羽がそろってきている幼い鳥が路上にいる場面にでくわすかもしれない。さわらないで！ 人間の匂いがつくから。でも、猫に襲われるかもしれない。そんなときは、猫を見張って幼鳥の番人になろう。何かの拍子に巣に戻れなくなったと推察される。ということは、巣が近くで親鳥もすぐ近くにいる。親鳥は我が子を探しているはずだ。そして、我が子を見つけると「ピヨ！」「ジュジュ！」と声をかけ、親を見つけた子は、なんと自分で飛べる！



5歳になると、階段を二段跳びするような成長のしかたをみせる。実際、二段跳びするかどうかは、親鳥の呼びかけと同じだ。保育ではこれを援助という。3歳、4歳でも二段跳

びするかもしれない。しかし、この時期は、「できるよ！」と親に見て欲しいから。5歳のときは違う。親に見て欲しいのは同じだが、〈できるような気がして〉やってみようという内面の発達が自身を行動に促す。だから、〈できるような気がして〉を確かめる結果となり、親に見て欲しい以上に自尊心が育まれる。

〈できるような気がして〉

——これを主体性という。

主体性は、自身で気づくこともあれば、おとなに促されて〈やってみようかな〉と気づく。友達のしていることを自分もしてみたいと思うようになる。つい先程まで、カエルがさわれない・さわりたくないという態度でも表していたのに、友達の初めてさわられた体験を目の当たりにして、意思とは関係なく「さわりたい！」と声を発してしまう。5歳の伸びしろは、自身の意思から有効になるだけでなく、友達や、親・おとなの働きかけ（援助）から大きく影響を受ける。



# 泣く→

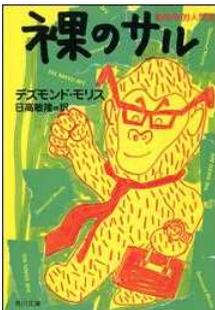
→ ほほえむ

→ 笑う・遊ぶ (言語の表出)

デズモンド・モリス『裸のサル』角川文庫 p135 //これらの基本的な種の音〔※〕と、種の表情〔※〕が、われわれの初期の発育の中でどのようにして生じてくるか、考察してみると興味深い。リズムカルに泣く反応は(だれでもいやというほど知っているように)、出生のときから存在する。ほほえみはすこしおくれて、約5週間で現われる。笑いとかんしゃくは3か月または4か月までは現われない。これらの行動パターンについては、もっとよくしらべてみる価値がある。//

※音と表情……ぎゃあという声、泣き声、笑い声、うなり声、リズムカルな泣き声、ほほえみ、しかめっ面、渋面、にらみつける眼つき、恐怖の顔、怒った顔

## 動物学的 人間像



← 左枠は、ヒト以外の動物とヒトの「泣き」を比較している。「泣く」という表象が「遊び」をやがて発生させるという大胆な仮説。

p137

//笑いが現われる時期は、親を認識する能力の発生と一致している。自分の父親を認識できる赤んぼうはかっこいい子といえるだろうが、笑う子はすべて自分の母親を認識している。赤んぼうは自分の母親の顔を識別し、他の成人から区別することを学習するまでは、のどを鳴らしたりすること

とはあっても、笑うことはない。赤んぼうは自分の母親を識別するようになると同時に、他の見知らぬ成人に対して恐れを抱くようになる。2か月まではどんな人でもかまわない。親切な大人はみな歓迎される。しかし、今や赤んぼうは周囲の世界に恐怖を感じはじめ、見知らぬ人はかれを動転させ、泣かせてしまうことが多くなる(もうすこしたつと、他の一部の大人も報酬を与えてくれるものだとすることを学習し、かれらに対する恐れはなくなる。しかし、これはもはや個人識別にもとづいて、選択的におこなわれるものである)。母親に刷りこみされた結果として、赤んぼうは自分が奇妙な矛盾の中におかれていることを感じる。//

正解は〈3 抱く〉

資料通番14.ver.01 The Renaissance of Childhood 2024.2.4

進化に沿ってヒトの発達を考える

山田利行

拡散歓迎 複写可(許諾無用)

<https://193pub.com/>

